

---

# 名探偵の休日

NT

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵の休日

### 【Nコード】

N0564C

### 【作者名】

NT

### 【あらすじ】

江戸川コナンが主役のお話です。

## ★プロローグ★

「カット！皆さんお疲れ様でした。」

監督の名はNT。

このお話の作者でもある方。

そろそろ解散って言う時に一人の少年がカメラの前に出てきて言葉を語り初めてきた。

「みなさんこんにちわ！今回の主役の江戸川コナンです。今回のお話は『名探偵の休日』だそうですよ。どんな話だって！？それは・・・あっ！やべえ、監督が近づいてきた。」

「コナン君、何を話してたんですか！？作品の内容なら読者の皆さんが逆に楽しめないのでは話てはいないですよね！？」

「わりいわりい・・・。」

「たぐう・・・。」

「そういえば監督！」

「ん？」

「もう一つの作品の『小さな探偵君達』はどうすんだよ！？」

「気まぐれで更新するので皆さんよかったですらお読みくださいね。」

「・・・（おいおい・・・、気まぐれかよ・・・）。」

「そろそろ読者の皆さんがうずき始めそうなので『名探偵の休日』スタートです！」

## 第1話：居場所

「ふわぁ~~~~!!」

一人の少年が口を大きく開けてあくびする様子はまるで危機感のない感じにも見える。

時刻は朝の七時って言うこともありスズメも元気に飛び回っている。

「コナンくん! もう朝ごはんできてるよ~!」

「はい!」

彼女の声によりその少年は朝の支度へ取り掛かる。

――俺が朝の準備してる間に少し自己紹介しよう。

俺の名は江戸川コナン。

こう見えても俺は高校生探偵と名が通った工藤新一だったんだけど、とある取引現場を目撃してしまい口封じの為に黒の組織に毒薬を飲まされてしまった。

その薬が試作品だったのか今の俺は小学生の姿へ。

今は工藤新一の姿を隠しながら黒の組織の情報を探ってる最中だ。

「はい! コナン君、バター。」

「ありがとう。蘭姉ちゃん。」

――この女子高生は俺の幼じみの毛利蘭。

「おい、蘭！俺もバターくれえ。」

——このおっちゃんは毛利小五郎。

今は言わずと知れた名探偵眠りの小五郎。

その原因はおっちゃんを眠らして俺が推理し名探偵へ仕上げたのが俺だけだね。

今は毛利家へ居候中。今は少しでも黒の組織らの情報が流れてくるのを待っている。——

「ごちそうさま！」

「ごっそうさん！」

朝食も終わりコナンはランドセルを背負い。

蘭は学生鞆と授業が終わってから空手でも始めるのか空手着を持ち行く準備を整える。

——蘭とおっちゃんには俺の正体は隠したまま過ごしている。

もし知ってしまったらもしかしたら殺される可能性があるためである。

過去に何回か蘭にばれかけたりしてきたが何とか誤魔化したりして終わっている。——

「コナン君！行こう！」

「うん！」

——この明るい人生を保つためにも絶対に奴らを見つけ出してみ  
せるぜ。——

## 第1話：居場所（後書き）

どうでしたか！？皆さん。

今のところはいまいちなのでは！？

皆さんからの感想お待ちしております。

次回の『名探偵の休日』よろしくお願いします。



## 第2話：通学路（前書き）

元気に毛利探偵事務所を出て行くコナンと蘭。  
その通学路についてのお話です。

## 第2話：通学路

階段を駆け下りて毛利探偵事務所を通り越しポアロの店を通らずに俺と蘭はしばらく二人だけで学校の方角へ向かって行く。

――毎朝の通学する時に思い出す俺が高校生だった時の姿を……。いつも蘭の一言で俺は困ることが多々ある。――  
今回もまた……。

「ねえ、コナン君……。？」

「なあに？ 蘭姉ちゃん。」

「新一元気にしてるかな！？」

「……。！？」

「ほら最近あいつ忙しいみたいでなかなか電話取れないみたいだし。――」

「きつとまた新一兄ちゃん事件とかあって取れないだけかもよ！？」

「そうだったらいいのにね。」

「……。蘭！？」。

――蘭の口から工藤新一の名前が出ると俺は決まって『事件じゃない』しかない用がない。最近は空手の練習が遅いせいか帰ったらす

ぐ晩御飯の支度に取り掛かる蘭の姿は珍しくもなく日常。晩御飯の後はずっと蘭の側に居ることになるため電話が取れないのは当然だ。

高校と小学校の道が途中から違う為にいつものようにしばらくのお別れとして蘭は元気よく俺に話かけてきた。

「コナン君！じゃあ、また帰ったらね。」

「うん！」

彼の瞳に映し出される彼女の姿は遠のいていく。

本当なら彼女と同じ道を通り学校まで行くはずだった。

本当なら・・・。

しばらくすると俺の様子を全て見透かしたような感じでどこからか笑いをこらえるような音が耳に飛び込んでくる。

その声の主は不適な笑みを浮かべた彼女の姿が目に見え飛び込んできた。

「あんだよ。灰原。」

「名探偵さんもそんな一面もあるのねって思ってたね。」

「はあ？」

「なぐんてね。」

——彼女の名は灰原哀<sup>はいばらあい</sup>、本名は宮野志保<sup>みやのしほ</sup>。

彼女はあの黒の組織の仲間であんなに俺が飲まされた薬の考案者だった。

だがとある事件のせいで彼女は組織を裏切り、どうせ殺されると死ぬ覚悟で飲んだ薬が俺と同じように体が縮んでしまった。

今も彼女は組織の追っ手から身を隠しながら過ごしている。

俺の正体を唯一知っている人物でもある。――

「あなたが考えてるように彼女に伝わってない部分があるかも知れないわね。」

「えっ!？」

「なんでもないわ。」

彼女の言葉はいつも不思議な呪文にも聞こえてくる。

何もかも見透かしたような顔も彼女には存在する。

まだ俺が知らない謎めいた彼女の存在を残しつつあるかもしれない。

## 第2話：通学路（後書き）

今は順調に更新してますがたまにリアルの事情により更新がまちまちになります。

次はどんな内容かは次回の『名探偵の休日』お楽しみください。  
感想もお待ちしております。

### 第3話：コナンの同級生（前書き）

今回は通学路から学校内までのお話。  
どんなことが起こるか？それは読んでからのお楽しみ。

### 第3話…コナンの同級生

言葉は一瞬沈黙を漂わせたが話のネタが見つかったかのように俺から話始めた。

「あのさ、灰原。」

「なに？」

「おめえって、たまに女っぽいこと言うよな。」

「あら！？私が男に見える？」

「そう意味じゃなくて、なぜ蘭の心が読めるようにわかるんだって聞いているんだよ！」

「女の感って感じね。張り詰めた行為は名探偵さんには気が付いてないみたいだし。」

「はあ？」

「そうでしょ！？

人それぞれ考えた方が違うのと一緒に男と女は人種も違う生き物である限り、なかなか知れない一面。」

——— そういえば過去にもう一人の探偵に似たようなこと言われたことがある。

そいつは男だが他人の行為などは見抜けても自分のことになるとにはさっぱりって言われたことがある。まるでその当時を思い出させ

る言葉。

あの時は俺の口から言ってくれるの待ってるって言ってた。  
今回も同じなのだろうか・・・!?

次第に学校が見えてくる。

その間俺と灰原は無言のまま歩いていく。

会話がないって訳ではない。

喧嘩したって意味でもない。

ただ単に話す内容がないだけのこと。

次第に学校の建物内へ進んでいく。

下駄箱らんには一期は目に入る三人が上履きに履き替えている最中だった。

俺らが挨拶する前にとある女の子が元気よく挨拶してきた。

「おはよう！コナン君、哀ちゃん！」

——この子は吉田歩美、よしだあゆみ小学1年B組のコナンとしての同級生でもある。

身長は俺とあまり変わらないがおかつぱ頭にカチューシャを着けた、好奇心旺盛な女の子。  
——

その女の言葉につられたかのように二人の男の子も反応した。

「よお！おめえらいつの間に!？」

——こいつは小嶋元太、こじまげんた小学1年B組のコナンとしての同級生。  
ガキの割には歩美の身長1.5倍、横幅3倍くらいはあり結構大柄



な体系の持ち主。

「おはようございます！ コナン君、灰原さん！」

—— こいつは<sup>つぶらや みつひこ</sup>円谷光彦、小学1年B組のコナンとしての同級生。  
言葉遣いは常に敬語で言い放つ少年。——

### 第3話：コナンの同級生（後書き）

次回はリアルな事情により更新日が未定です。

次回の『名探偵の休日』お楽しみください。  
感想もお待ちしております。

## 第4話：名探偵の心理（前書き）

<<読者の皆様>>

皆様お元気にしていましたでしょうか!?

お待ちいただいていた方、大変お待たせしました。

約6ヶ月ぶりの更新です。

多々リアルな事情遅れることがあります但暖かく見守っていただけると幸いです。

それでは続編の第4話スタート!

## 第4話…名探偵の心理

俺の足は自然に教室に向かっている。

まるで灰原、歩美、光彦、元太の足取りにあわせて歩いていく。

次第に教室に向かっていき自分達の席へ行くまでのんびりと話が流れて俺の中ではいつもこいつらの姿を見ると自ら作り出す演技ではなく、本来の自分自身の行為になる。

いつからだろう・・・!?

コナンとしての最初の一ページはそんなことはなかったのに・・・。

俺の考えを惜しんでいつものように小林先生がやってくる。

一時間目のチャイムの合図とともに始めていく。

俺の頭の中には今朝の出来事を思い出していた。

『新一元気にしてるかな!?』

俺の視線は窓辺に向かってずっと蘭の言葉に疑問を隠せない。

その間俺の耳には厚い壁を現すかのように周りの声が流れてくることもなく、俺の中には事件より今は蘭の言葉が気になって仕方がない。

自然に俺の集中力が切れた途端、小声で甲高い声が響いてくる。

「コッ、コナン君!？」

「……！」

ふと気が付いた時には算数で当てられていたことすら気が付かなかった俺。

その様子に気が付いたのか歩美が密かに呼んでくれたのだ。

俺にしたら小学一年の算数だなんて簡単すぎて意識が遠のくのも仕方がないがやっぱ蘭の言葉にクギを押されたような感じで頭から離れない。

周りの人らに気づかれないように俺は ＊淡々（たんたん） 〓 あっさり＊ と簡単に答えを導き出している姿に決まって休憩時間になれば元太、光彦、歩美が聞いてくる。

聞くのが悪いって意味ではないが一度小学校を卒業している俺にしたら簡単すぎる問題。

唯一解けない問題が音楽と……、人の心。ただそれだけのこと。

#### 第4話：名探偵の心理（後書き）

NT「作者のNTです。」

??「やっ続編がきたか。。。」

NT「ん？コナン君じゃないか！」

コナン「かなりおせえぞ。NTさん。」

NT「まあ私のリアルが忙しいこともありなかなか・・・。」

コナン「それで怒ってるわけじゃねえけど、俺の仕事が長期間休み状態だったからこれからもっとつめてきてくれよお！」

NT「了解！それは次回は一応未定って形でっ！」

コナン「えっ・・・！？」

NT「それでは・・・。」

コナン「おい・・・。」

NT「次回の『名探偵の休日』お楽しみください！」

コナン「おっ、おい・・・。」

NT「それまでまたね！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0564c/>

---

名探偵の休日

2010年10月21日20時22分発行